

お金 2.0 [新しい経済のルールと生き方]

著者：佐藤航陽、発行所：幻冬舎
～第3章 価値主義とは何か～

(担当:舘林) p.148～p.156

【限界を露呈し始めた資本主義】

- ・1990年代からリーマンショック頃にかけて金融の世界が実体経済とはあまりにもかけ離れたものになってしまった。
- ・最も予測が難しい市場が株式市場や為替などの金融市場
- 金融市場は他と比べて見るべき指標が多く、かつそれぞれの指標が複雑に絡み合っている。
- 一度法則性を理解しても予測モデルは外部環境の変化によってすぐに使えなくなる。
- ⇒それっぽい数式によってパッケージ化して大量に販売したために金融危機が不可避に。
- ・ツールだったお金が、増やすという手段が強調されるようになった。
- 実体経済や人々の生活と全く関係のないところでお金だけが動くように。
- ⇒お金からお金を生み出し札束をただ積み上げる世の中に疑問

【資産経済の肥大化と金余り現象】

- ・我々の生活している経済は「消費経済(実体経済)」と「資産経済(金融経済)」が混ざり合っていてきている。
- 世の中に流通しているお金の流れの約9割は資産経済で生まれる。
- ・資産経済は消費経済が少し変わるだけで大きく変わる。
- ・消費経済に対する資産経済の割合が増えている。
- 用途がないためにお金がいろいろなところに滞留
- ・資金調達が容易な環境にあるため、相対的にお金の価値そのものが下がり続けている。
- 増やすことが難しい、信頼や時間や個性のようなお金では買えないものの価値が、相対的に上がっている。

【お金にはなりにくい「価値」の存在】

- ・資本主義が考える価値あるもの(お金になるもの)と、世の中の人の考える価値あるもの(お金にならないもの)の間に大きな溝ができ、人々が違和感を感じている。

・資本主義の発達でお金の影響力がどんどん強くなり、人々が感じる価値観とかけ離れて増殖していった。

→お金と価値の関係はどんどん薄くなっていく。

・IT が誕生したことで電子化が進み、お金が価値を媒介する唯一の手段であったのに、お金である必要性がなくなった。

→仮想通貨やポイントなどで価値がやり取りできるように。

・価値を最大化しておけば、色々な方法で好きなタイミングで他の価値と交換できるようになる。

・ネットの普及で自分の価値をどんな方法で保存しておくか選べるようになってきた。

Ex) ツイッターのフォロワー100 万人以上と1 億円の貯金

【コメント】

メルカリなどのフリマアプリでは売って買ってを繰り返して現金を用いずに取引するユーザーも多いし、ユーチューバーという職業が誕生したのが2011 年頃であるが、これはリーマンショックの2,3 年後である。筆者の言う通り、リーマンショックあたりを機にお金という概念が変わってきているのは紛れもない事実だと感じた。だとしたら、国の借金の影響などから円の価値が心配な今日、今後一番安全な価値貯蔵のツールとは何なのだろう。

担当：林 (p156~165)

【社員の満足度を投資判断の材料にするファンド】

・財務諸表はものや土地を前提に作成され、これをもとに企業価値を判断する。

・製造業からサービス業が中心になる産業のシフトの中では、財務諸表を見ても、企業の競争優位性となる価値が反映されておらず、その将来性を予測するのが難しい。

→海外の一部の機関投資家は、企業の従業員の満足度調査のデータを投資判断の参考に取り入れている。

・IT の世界では、優秀な頭脳が集まる企業は革新的なサービスを打ち出し次世界を牽引することができ、優秀な人材が逃げてしまった企業は時代に淘汰される。

→様々な福利厚生を充実させ、人材獲得競争を繰り広げている。

・将来的には従業員満足度のようなデータも「資産」として認識されるかもしれない。

【資産としては認識されないデータの「価値」】

・ネット企業では、財務諸表上の価値として認識されないものは「人材」と「データ」であり、データは金融的な考えでは存在しない価値のないものと無視されている。→ネット企業ではデータこそが価値であり、お金を生み出す「資産」であるのに対して、現在の金融や会計などの枠組みはそれをカバーしていない。

→金融の枠組みは現実世界を正しく認識できなくなっている。

ex)グーグルは Youtube など得た情報をデータとして蓄積し、好きな時に広告システムで売り上げ利益といった資本に転換する手段を持っている。

→PL/BS から見る企業の規模と現実世界での影響力に大きなズレが生じる。

・ネットがあらゆるデバイスにつながりすべての企業に浸透すれば、「IT 企業」という分類は消え、すべての企業が IT を駆使した企業になる可能性がある。

・テクノロジーの発達により、データが価値として認識されるようになり、お金では計上することができない「価値」を中心に回っている会社が成長している。

→今の金融の枠組みが限界にきていることを物語っている。

【資本主義から「価値主義」へ】

・資本主義上のお金というものが正しく認識・評価できなくなり、今後は資本に変換される前の「価値」を中心とした世界に変わっていくと予想できる。

→この流れを「価値主義 (valualism)」と呼ぶ。

・価値主義における「価値」とは経済的な実用性、人間の精神にとっての効用、社会全体にとってポジティブな普遍性のすべてを対象にしている。

・あらゆる価値を最大化すれば、その価値をいつでもお金に変換することができ、またお金以外のものと交換できるようになる。

・お金は価値を資本主義経済の中で使えるものに変換したものに過ぎず、価値を媒介する 1 つ選択肢に過ぎない。

【コメント】

・自分が担当した 3 つの項で筆者は、現代の金融などの枠組みが限界にきていることを主張していて、これからの企業の価値を判断するには今までの考え方を時代の進歩とともに変えていく必要があると思いました。

担当：古森 P166～177

【「価値」の 3 分類】

・価値という言葉は 3 つに分類される

①有用性としての価値

経済・経営・金融・会計などでいう価値。実世界での「リターン」を前提とした価値

→現実世界で利用できないものは有用性としての価値はない

②内面的な価値

愛情・共感・興奮・好意・信頼など個人の内面にポジティブな効果を及ぼすときの表現感情には実用性はないが、美しい景色を見た時などの感情に価値があると表現できる

③社会的な価値

社会全体の持続性を高めるような活動に対するときに使う表現

金融や経営の面ではコストに当たるが、砂漠に木を植えるなどに価値を感じる人もいる

- ・この3つの概念を区別せずに使っている。また、いずれも脳の報酬系を刺激する現象

【資本主義の問題点をカバーする「価値主義」】

- ・資本主義の問題点…有用性のみを価値として認識し、2つを無視してきた点
実際に①のみを追求し、②と③を無視すると崩壊する。Ex.自社の利益のみ追求する企業
- ・価値主義で扱う価値…①だけでなく、②や③もすべて価値として取り扱う
②や③は物質がなく曖昧であるためテクノロジーの活用が不可欠
- ・価値主義とは、資本主義が認識できなかった領域もテクノロジーを使ってカバーする、資本主義の発展系

【「共感」や「感謝」などの内面的な価値の可視化と流通】

- ・内面的な価値は、スマホの普及により万人がネットに接続している状態であるから、データとして可視化することが可能
→SNSによって注目・興味・関心が数値として認識できるように
- ・内面的な価値を軸とした独自の経済が作れる 評価経済、信用経済
Ex.社内通貨

【「評価経済」の落とし穴】

- ・評価経済・信用経済…お金でなく、他人からの評価や信用などの人間の内面的な感情によって回る経済
- ・拡大の仕方→評価から評価を拡散力をテコに生み出していくことが可能。また、影響力や認知や評価といった価値は、色々なものと交換することも可能。
- ・評価経済や信用経済にネガティブな印象を持つ理由
 - 話題になっている仕組みが評価や信用ではなく、注目や関心に過ぎないから
 - 注目や関心などの特定の内面的な価値のために、共感や好意などの他の内面的な価値や治安や倫理などの社会的な価値が犠牲になることがあるから
 - 資本主義に対して懐疑的な人が増えたのも同様の理由
Ex.詐欺・強要、金融危機、テロ・紛争、自然破壊・環境汚染
- ・評価経済や信用経済も共感や好意、治安や倫理が犠牲になる行為が目立つと資本主義と同様に世の中がブレーキをかける
→絶妙なバランス感覚で成り立っている
- ・行き過ぎると資本主義のような問題が起こり得ることを全員が認識するべき

【コメント】

インターネットが誰にとっても身近になった現在では、すでに有用性としての価値だけでなく、注目や関心などの内面的な価値が高まっていると思った。(例えば、SNS に載せるために食べない料理を注文するなど)内面的な価値のうち評価や感謝などは、例にあった社内通貨のほか地域通貨にもいえる。それらもネットを介することでより広まると感じた。